

「困った子は指導者、保育者の心が生み出している」

子どもとかかわっていると実にいろんな子どもがいて一緒にいておもしろいです。正直、腹の立つこともあります。おもしろくて腹がたっても、やっぱり子どもと接することは楽しいものです。そんな楽しい中にも接することで悩みも生まれてきます。5年生の男の子 A 君は、工作の材料を配ると毎回「僕のがない。」と言い、その無いと言ってきた材料は必ず後から出てきて、完成した作品が納得いかないと言った材料は必ず「これは（他の子どもと）違う！」と言ってきて、私の中では扱いにくい困ったちゃんでした。紙コップでうで時計を作った工作の日の出来事です。準備に時間がかかるため、休み時間から教室に入って作業をしていると、その A 君は私から片時も離れません。休み時間なので、ちょこっと教室から出たかと思えばすぐに戻り、また私のそばにやってきます。やがて休み時間の終わりを告げるベル係の中学生が「ブレイクオーバーブリーズ」と言いハンドベルを鳴らしながら校内を歩きました。するとその言葉を A 君は待っていたかのように「トシコ、ぼく、ベルが鳴ったから教室に来たよ。」ととても嬉しそうに言うのです。この言葉に心の奥底からこみ上げてきたものがあって目がかすみました。正確に言えば、ベル係の「ブレイクオーバーブリーズ。」の時すでに教室にいました。準備をしている私の手元や壁に貼られた紙の時計を見て授業を誰よりも楽しみにしていたのです。私はずっとこの A 君を「困った子」として見ていました。困った子と言うのは、私の心が生み出した扱いにくい子どもだったのです。私は勉強が出来て大人のいう事を素直に聞く子どもも、もちろん気にかけるけれど、それ以上に「手のかかる子、泣き虫な子、やんちゃな子」が前職より何倍も気にかかっていたはずなのに、いつの日からか「ぼくの材料がない」とか「ぼくの作品は違う」と言うだけで面倒な子イコール困った子になっていました。休み時間のほとんど片時も私から離れずいたのに「ぼく、ベルが鳴ったから教室に来たよ。」ただこれだけの言葉でした。この日の授業は、最後まで「ぼくの材料が無い」「（他の子とくらべて）ぼくの作品は違う」と言うことなくやり遂げました。完成したうで時計をうれしそうに腕につけて私に微笑みました。その A 君の微笑んだ写真は涙でブれてしまっていました。『困った子はどこにもいない。』改めて肝に銘じる出来事でした。

ガーナ挨拶 No.35 2021/04/26

國分敏子

